

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）	教育 0-1
1. 工学部	教育 1-1
2. 工学府	教育 2-1
3. 情報工学部	教育 3-1
4. 情報工学府	教育 4-1
5. 生命体工学研究科	教育 5-1

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	教育活動の状況	教育成果の状況	質の向上度
工学部	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
工学府	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
情報工学部	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	大きく改善、向上している
情報工学府	期待される水準を上回る	期待される水準にある	質を維持している
生命体工学研究科	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	高い質を維持している

注目すべき質の向上

情報工学部

- 第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）に開発した学修自己評価システムを全学に展開し、学生自身の達成度評価による学修意識・学習習慣改革を行い、学修の自己管理能力の涵養やキャリア形成に取り組んでいる。また、第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に学生の自己評価を教員が分析する機能を追加することで、教員がシステムを利用して学生指導を行っている。

生命体工学研究科

- 専門コースとして、他大学や他学府、企業と連携し、カーエレクトロニクスコース、インテリジェントカー・ロボティクスコース、グリーンイノベーションリーダー育成コース、医歯工連携教育プログラムを開設し、社会ニーズに対応する実践的な教育活動を維持している。
- 国際通用性のある人材育成のため、平成22年度から「国際マインド強化プログラム」、平成26年度から「UPM短期派遣プログラム」、平成27年度から「先進的支援ロボット工学の国際展開を担う人材育成プログラム」を開始しているほか、ロレーヌ工科大学（フランス）等との間でダブルディグリープログラムを実施している。
- 第2期中期目標期間に学生がロボカップ中型リーグにおいて8連覇しているほか、平成27年度にロボット分野で評価の高いIROSにおいてBest Application Paper Award受賞している。
- 第2期中期目標期間の博士前期課程修了生の就職率は、平成22年度の92.6%から平成27年度の99.2%に増加している。

工学部

I	教育の水準	教育 1-2
II	質の向上度	教育 1-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- グローバル化した社会の中で活躍し続けることができる技術者に必要な要素をグローバル・コンピテンシーとして定め、平成25年度に文部科学省国立大学改革強化推進補助金に採択された「社会と協働する教育研究インタラクティブ化加速パッケージ」により、グローバル・コンピテンシーの養成に関する取組を行っている。
- 海外派遣プログラムの策定や事前・事後学習によるグローバル教養教育を担当するGCE専門教職員を第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に9名採用し、グローバル技術者育成に取り組んでいる。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 課題解決能力等を育成するため、PBL教育を推進しており、平成25年度から全学科においてPBL科目を必修科目としている。また、PBLのプレゼンテーションの場として成果発表会を実施しており、平成26年度に高等専門学校等と合同成果発表会を開催している。
- 平成25年度からグローバル人材育成のため、海外派遣プログラムや海外インターンシップ、グローバル教養教育を行っている。海外派遣プログラムでは、海外派遣の効果を最大限に高めるために渡航前後の事前学習、事後学習を実施しているほか、渡航前後にルーブリックによる自己評価を行うことにより、学生自身が渡航の効果を確認できる方法を開発し、実施している。

以上の状況等及び工学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- TOEIC のスコア 600 点以上を基準とする上級英語科目に関する単位認定者数は、平成 22 年度の 5 名から平成 26 年度の 25 名となっている。
- 学生の海外留学及び留学生の受入を促進するため、25 か国・地域の 94 機関と国際交流協定を締結しており、学生の海外派遣人数は、平成 22 年度の 23 名から平成 26 年度の 122 名となっている。
- 平成 25 年度に実施した授業アンケート結果では、「授業内容は全般的に理解することができた」等の全項目において、肯定的な回答が 80%以上となっている。

観点2-2「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間の就職率は、96.3%から 100%の間を推移しており、大学院への進学率は平成 22 年度から平成 26 年度の平均で約 65%となっている。
- 平成 24 年度から平成 26 年度の卒業生を採用した企業に対するアンケート結果では、他大学の学生と比べて優れている点として、「基礎学力」、「専門能力」等をあげている。

以上の状況等及び工学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- グローバル化した社会の中で活躍し続けることができる技術者に必要な要素をグローバル・コンピテンシーとして定め、平成 25 年度に文部科学省国立大学改革強化推進補助金に採択された「社会と協働する教育研究インタラクティブ化加速パッケージ」により、グローバル・コンピテンシーの養成に関する取組を行っている。
- 平成 25 年度からグローバル人材育成のため、海外派遣プログラムや海外インターンシップ、グローバル教養教育を行っている。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第 2 期中期目標期間の就職率は、96.3%から 100%の間を推移しており、大学院への進学率は平成 22 年度から平成 26 年度の平均で約 65%となっている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

工学府

I	教育の水準	教育 2-2
II	質の向上度	教育 2-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 環境・エネルギー問題を解決するためのリーダーを育成する部局横断型のグリーンイノベーションリーダー育成コース、異文化コミュニケーション能力とシステム工学的思考力をもったグローバル技術者を育成する専攻横断型の宇宙工学国際コース等の教育プログラムを開設している。
- 平成26年度に博士後期課程を1専攻に再編し、幅広い専門的教養を身に付けた人材育成のための他分野融合科目を導入している。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 6年一貫のグローバル・エンジニア養成コースにおける海外派遣を円滑に行うことを目的として、平成26年度から4学期制を導入している。
- 専攻横断型の宇宙工学国際コースでは、講義を英語により実施しており、英語による講義のみで修了することが可能となっている。平成25年度から平成27年度と同コースの履修者数は博士前期課程は43名、博士後期課程は20名となっている。
- ロレーヌ工科大学（フランス）等、5か国7大学とダブルディグリー協定を締結しており、第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）におけるダブルディグリープログラムの修了生数は26名となっている。

以上の状況等及び工学府の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目 II 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成22年度から平成26年度における学生による研究発表数は毎年80件以上となっている。また、国際会議論文を含む査読付き論文数は40件程度で推移している。

- 学生の海外派遣率は、博士前期課程では平成 22 年度の約 2 %から平成 27 年度の約 13%、博士後期課程では平成 22 年度の約 2 %から平成 27 年度の約 8 %となっている。

観点 2 - 2 「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第 2 期中期目標期間の博士前期課程修了生の就職率は平均 95%以上となっている。また、修了生の就職先は約 90%が「ものづくり」に関連する業種となっている。
- 平成 26 年度に実施した修了時アンケート結果では、「工学専門科目」、「修士・博士研究」の受講が、自己形成に及ぼした教育効果について、肯定的な回答は 90%以上となっている。

以上の状況等及び工学府の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 環境・エネルギー問題を解決するためのリーダーを育成する部局横断型のグリーンイノベーションリーダー育成コース、異文化コミュニケーション能力とシステム工学的思考力をもったグローバル技術者を育成する専攻横断型の宇宙工学国際コース等の教育プログラムを開設している。
- ロレーヌ工科大学（フランス）等、5か国7大学とダブルディグリー協定を締結しており、第2期中期目標期間におけるダブルディグリープログラムの修了生数は26名となっている。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 学生の海外派遣率は、博士前期課程では平成22年度の約2%から平成27年度の約13%、博士後期課程では平成22年度の約2%から平成27年度の約8%となっている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

情報工学部

I	教育の水準	教育 3-2
II	質の向上度	教育 3-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 平成 25 年度に文部科学省国立大学改革強化推進補助金に採択された「社会と協働する教育研究のインタラクティブ化加速パッケージ」におけるグローバル人材育成戦略に基づき、グローバル教養教育や海外派遣プログラムを推進するための専門職教員 5 名と事務職員 4 名を雇用し、グローバル人材育成体制を整備しており、海外派遣プログラムを利用した協定校への派遣者数は、平成 22 年度の 20 名から平成 27 年度の 59 名へ増加している。
- 教育システムの全学統一やクォーター制導入のほか、入学者選抜試験の合格者に対して、入学前教育と初年次教育により自学自習力を育成する取組を実施している。
- 教育改善に産業界からの意見を取り入れるため、産業界からの委員を含む「産学連携教育審議会」を整備している。
- 平成 18 年度に全学科が日本技術者教育認定機構（JABEE）認定を受けて以来、継続して JABEE 認定を受けている。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 専門科目では、問題発見・解決能力、コミュニケーション能力、協調性等の能力を養成することを目的とした PBL 科目や電子・電気回路や機械をソフトウェア制御する実践的教育を目的としたフィジカルコンピューティング科目を開講している。PBL 科目の「超 PBL プロジェクト S」等においては、従来の与えられた課題解決型の学修にとどまらず、課題発見・解決型の実践的 PBL を地元企業との連携により実施している。
- 学生の学修意識と学習習慣の改革のために、独自開発した学修自己評価システムを導入しており、第 2 期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）に学生の自己評価を教員が分析する機能を追加し、学生指導に利用している。
- 国際先端情報科学者養成プログラム等により、学生の海外派遣を推進するとともに、学習・教育評価システムとして海外派遣学生の事前・事後教育のためのルーブリックを組み入れた GCE ポートフォリオを開発し、海外派遣の達成度評価に活用している。

- 第2期中期目標期間に基礎科目「解析Ⅰ」では、初級・普通・上級の3階層編成による習熟度別クラス編成を実施しているほか、基礎教育（数学、物理、情報、英語）では、非常勤の学習相談員による個別指導の取組を「学習コンシェルジェ」事業として実施し、授業時間外での学生の自己学習支援を行っている。

以上の状況等及び情報工学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 海外派遣者数は、平成22年度の20名から平成27年度の59名へ増加している。また、派遣前後における学生の自己評価点について、「多様な文化の受容」、「グローバルな志向性」等の全評価項目において、派遣後の評価点が上昇している。
- 平成26年度に実施した卒業時の学習目標の達成度についてのアンケート結果では、「技術者倫理」、「基礎学力」及び「応用能力」の項目の肯定的回答の割合は8割以上となっている。
- 学習コンシェルジェ事業による基礎科目（数学・物理）の底上げ教育の実施によって、機械情報工学科物理系科目における中間試験成績不振者のうち学習コンシェルジェを利用した学生について、期末試験と中間試験の点数の差が未利用者と比較して、20点程度大きくなっている。

観点2-2「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成21年度から平成26年度における就職者の55%が情報通信業、23.3%が製造業に従事している。
- 平成25年度及び平成26年度に実施した卒業生が就職した企業を対象としたアンケート結果では、他大学の学生より優れている点として、基礎学力、専門能力等をあげている。

以上の状況等及び情報工学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

II 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 大きく改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）に開発した学修自己評価システムを全学に展開し、学生自身の達成度評価による学修意識・学習習慣改革を行い、学修の自己管理能力の涵養やキャリア形成に取り組んでいる。また、第2期中期目標期間に学生の自己評価を教員が分析する機能を追加することで、教員がシステムを利用して学生指導を行っている。
- 基礎教育（数学、物理、情報、英語）における学習相談員による個別指導を行う学習コンシェルジェ事業により、授業時間外での学生の自己学習支援を行っている。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 海外派遣プログラムを利用した協定校への派遣者数は、平成22年度の20名から平成27年度の59名へ増加し、派遣前後での学生の自己評価において「多様な文化の受容」、「グローバルな志向性」等の評価項目で達成度得点が上昇している。
- 学習コンシェルジェ事業による基礎科目（数学・物理）の底上げ教育の実施によって、機械情報工学科物理系科目における中間試験成績不振者のうち学習コンシェルジェを利用した学生について、期末試験と中間試験の点数の差が未利用者と比較して、20点程度大きくなっている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 第1期中期目標期間に開発した学修自己評価システムを全学に展開し、学生自身の達成度評価による学修意識・学習習慣改革を行い、学修の自己管理能力の涵養やキャリア形成に取り組んでいる。また、第2期中期目標期間に学生の自己評価を教員が分析する機能を追加することで、教員がシステムを利用して学生指導を行っている。

情報工学府

I	教育の水準	教育 4-2
II	質の向上度	教育 4-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）において、民間企業等の外部機関との連携により実践的な技術者教育を行う4コースを新設しており、このうち3コースが文部科学省の「大学間連携共同教育推進事業」に採択され、民間企業等とした遠隔講義やインターンシップ、PBL等を行っている。
- 専攻横断的な実践的技術者教育の検証・改善を行うため、コース教育専門部会を設置し、コース・モジュール制の実施状況のチェックやコースの改編、新設を審議するとともに、インターンシップ、PBLにおける学生アンケートや教員、企業側からの学生評価を分析・検証している。また、分析結果はコース運用グループにフィードバックし、教育改善につなげている。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 専攻横断的なコース・モジュール制の下、修了後のキャリアパスを意識した系統的履修指針を与えるためのコースを複数開設している。第2期中期目標期間に4コースを新設し、体制を拡充・強化したことにより、コース履修者数は平成22年度の60名から平成26年度の148名へ増加している。
- 高度なソフトウェア技術者を養成するため、平成19年度から実施しているカーネギーメロン大学ソフトウェア工学研究所（米国）との連携による Personal Software Process（PSP）関連の科目を引き続き実施しているほか、平成22年度から Team Software Process（TSP）関連の科目を新たに開講しており、PSP及びTSP関連科目の履修者数は第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）の年度平均5.3人から第2期中期目標期間の年度平均12.8人へ増加している。
- 海外における研究活動やインターンシップを推奨する「グローバル情報学研究」、「国際インターシップ」の開設や学生の専門分野の語学力を高めるための英語による授業の開講等の取組を実施している。これらの取組の結果、海外との学生交流について、平成22年度と平成27年度を比較すると、学生の派遣人数は2名から67名へ、受入人数は2名から26名へ増加している。

以上の状況等及び情報工学府の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間の博士前期課程の除籍・退学率は平均 1.8%となっている。
- 第2期中期目標期間における学生一人当たりの査読付き論文の発表件数は、博士前期課程では 0.23 件から 0.25 件、博士後期課程では 0.83 件から 1.28 件の間を推移している。

観点2-2「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 同窓会の支援を受けて、修了生を講師とする合宿研修等の様々なキャリア教育を実施しており、第2期中期目標期間の就職率は 97.4%から 99.5%の間を推移している。
- 平成 25 年度及び平成 26 年度に実施した求人企業に対するアンケート結果では、他大学の学生に比べて優れている点として「基礎学力」、「専門能力・資格」をあげている。

以上の状況等及び情報工学府の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間に民間企業や他大学と連携した実践的技術者教育を目的とした4コースを新設し、コース履修者数は平成22年度の60名から平成26年度の148名へ増加している。
- 海外における研究活動やインターンシップを推奨する「グローバル情報学研究」、「国際インターシップ」の開設や学生の専門分野の語学力を高めるための英語による授業の開講等の取組を実施している。これらの取組の結果、海外との学生交流について、平成22年度と平成27年度を比較すると、学生の派遣人数は2名から67名へ、受入人数は2名から26名へ増加している。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間における博士前期課程の就職率は97.4%から99.5%の間を推移しており、平成26年度に実施した修了時アンケート結果では、修了後の進路の満足度についての肯定的回答の割合は8割以上となっている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

生命体工学研究科

I	教育の水準	教育 5-2
II	質の向上度	教育 5-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 北九州市立大学及び早稲田大学との連携によるインテリジェントカー・ロボティクスコース等の他大学、企業との連携等による教育コースを開設している。
- 学生アンケート及び企業アンケートの実施や企業との運営委員会により、学生や企業からの意見をフィードバックする仕組みを整備しており、講義や総合実習の改善等を行っている。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 専門分野を体系的に学習できる履修モデルを明示し、学生にキャリアパスを意識した履修計画の作成を促している。
- 社会ニーズに対応する実践的な専門コースとして、他大学や他学府、企業と連携し、カーエレクトロニクスコース、インテリジェントカー・ロボティクスコース、グリーンイノベーションリーダー育成コース、医歯工連携教育プログラムを実施している。
- 平成 22 年度から研究分野の専門性のみならず、異文化理解や英語によるコミュニケーション能力に優れたグローバル人材の輩出を目的する「国際マインド強化プログラム」、平成 26 年度から外国語によるコミュニケーション能力や国際性を養い、グローバルエンジニアとしての素養を身に付けることを目的とした「マレーシアプトラ大学（UPM）短期派遣プログラム」を実施している。平成 27 年度におけるプログラムの参加者数は、「国際マインド強化プログラム」は 12 名、「UPM 短期派遣プログラム」は 36 名となっている。また、平成 27 年度からは「先進的支援ロボット工学の国際展開を担う人材育成プログラム」により、共同学習による留学生・日本人学生のグローバル人材育成を実施しており、日本人学生 9 名、留学生 12 名が参加している。
- 複数のコースでルーブリックを用いた学生本人による学習達成度評価を実施している。特に、海外渡航前後でルーブリックによる達成度を測る仕組みを導入しており、海外渡航による学習効果の確認に利用している。

以上の状況等及び生命体工学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に学生がロボカップ中型リーグにおいて8連覇しているほか、平成27年度にロボット分野で評価の高いIROSにおいてBest Application Paper Awardを受賞している。
- 平成22年度から平成26年度の学生が関与した論文数は、年度平均で約90件となっている。
- 平成26年度に実施した修了時アンケートの結果では、専門科目の満足度についての肯定的回答の割合は、講義では98%、演習・実習では94%となっている。
- ルーブリックによる教育成果の達成度評価において、インテリジェントカー・ロボティクスコース、グリーンイノベーションリーダー育成コース、「国際マインド強化プログラム」、「UPM 短期派遣プログラム」による海外渡航を通じた教育効果が確認されている。

観点2-2「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間の博士前期課程修了生の就職率は、92.6%から99.2%の間を推移している。
- 第2期中期目標期間の博士前期課程修了生の就職先は製造業・情報通信業が中心となっている。また、修了生の10%程度が博士後期課程に進学している。
- 第2期中期目標期間の博士後期課程修了生は、製造業、情報通信業、教育・学習支援業、学術研究・専門・技術サービス業等、幅広い業種に就職している。

以上の状況等及び生命体工学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

II 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目 I 「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 専門コースとして、他大学や他学府、企業と連携し、カーエレクトロニクスコース、インテリジェントカー・ロボティクスコース、グリーンイノベーションリーダー育成コース、医歯工連携教育プログラムを開設し、社会ニーズに対応する実践的な教育活動を維持している。
- 国際通用性のある人材育成のため、平成 22 年度から「国際マインド強化プログラム」、平成 26 年度から「UPM 短期派遣プログラム」、平成 27 年度から「先進的支援ロボット工学の国際展開を担う人材育成プログラム」を開始しているほか、ロレーヌ工科大学（フランス）等との間でダブルディグリープログラムを実施している。
- 複数のプログラムでルーブリックを用いた学生本人による学習達成度評価を導入している。

分析項目 II 「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第 2 期中期目標期間に学生がロボカップ中型リーグにおいて 8 連覇しているほか、平成 27 年度にロボット分野で評価の高い IROS において Best Application Paper Award を受賞している。
- ルーブリックによる教育成果の達成度評価において、インテリジェントカー・ロボティクスコース、グリーンイノベーションリーダー育成コース、「国際マインド強化プログラム」、「UPM 短期派遣プログラム」による海外渡航を通じた教育効果が確認されている。
- 第 2 期中期目標期間の博士前期課程修了生の就職率は、平成 22 年度の 92.6% から平成 27 年度の 99.2% に増加している。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 専門コースとして、他大学や他学府、企業と連携し、カーエレクトロニクスコース、インテリジェントカー・ロボティクスコース、グリーンイノベーションリーダー育成コース、医歯工連携教育プログラムを開設し、社会ニーズに対

応する実践的な教育活動を維持している。

- 国際通用性のある人材育成のため、平成 22 年度から「国際マインド強化プログラム」、平成 26 年度から「UPM 短期派遣プログラム」、平成 27 年度から「先進的支援ロボット工学の国際展開を担う人材育成プログラム」を開始しているほか、ロレーヌ工科大学（フランス）等との間でダブルディグリープログラムを実施している。
- 第 2 期中期目標期間に学生がロボカップ中型リーグにおいて 8 連覇しているほか、平成 27 年度にロボット分野で評価の高い IROS において Best Application Paper Award を受賞している。
- 第 2 期中期目標期間の博士前期課程修了生の就職率は、平成 22 年度の 92.6% から平成 27 年度の 99.2% に増加している。

